



【研究者対談】

大学院医学系研究科
保健学専攻 看護アセスメント学分野 教授 丸山 良子

大学院医学系研究科
保健学専攻 看護教育・管理学分野 教授 朝倉 京子

しなやかに、凛と、力強く。 看護学発展期を支えていく。

本冊子初の対談企画。取材陣の緊張を解きほぐしてくれるかのような笑顔で、会場のドアを開けられた丸山、朝倉両先生。科学への萌芽がぎざした幼いころの話に始まり、まだ黎明期の学問分野を修める苦労、ジェンダーバイアス、ロールモデルの存在／不在、これからの目標など、話題は縦横に広がりました。軽やかな笑い声の絶えなかった対談の内容をダイジェストでお届けいたします。

はっきりとした将来像を結ぶ間もなく、「面白い」という感懐に導かれて歩んできました(丸山)

丸山 研究者の道に進んだきっかけということですが、私の場合は医療系への興味や関心も、そして研究者／教員になりたいのかどうか、自分の中でははっきりとした像を結ばないまま、「面白い」という感懐に導かれて歩んできたようなもののなのです。ただ小さい頃から生き物に対する興味は人一倍だったようで、朝早く起きては、誰に言われるでもなく自然観察を日課としていました。その頃は、暮らして自然が近接していて、そこそこに色濃い生命の息吹が満ちていたのです。植物や昆虫などいろいろなものを蒐集しては、母親を驚かせていました。そして共働きの家でしたから、いずれ私も働いて自立・自律するのだという意識や職業観が自然に涵養されていったように思います。高校卒業後の進路選択の折も、両親からの示唆や要望というものはなかったですね。あなたの好きな道を行きなさい、というわけです。海外の大学に行きたいと言っても喜んで送り出してくれたと思いますね。その点にはとても感謝しています。医療系の大学に進みましたが、これは生きとし生けるものへの関心が、特にヒトへの興味に変わっていったということでしょうか。朝倉先生は学童期・青年期にはどんなことに興味をもたれていたのですか？

朝倉 私が通っていた高校は、中高一貫の教育実験校で、教諭も修士の学位を持っていたり、教えながら論文博士を目指したりなど「科学的な視座」を前提とする学校だったのです。私はとりわけ生物に興味があって、必修の科目以外に実験中心のクラスも選択していたほどで、ゆくゆくは生物学者になりたいと思いを巡らせていました。実験生物を担当してくださっていたのは女性教員で、博士号を持つ非常勤講師でした。その事実に対峙して「学問を深く究めたのに正規教員ではないなんて」と多感な私は静かな憤りを感じたものです。もちろんその考察と思弁に未熟・未消化なところはあったかと思いますが、男性中心の科学の世界で、女性が研究者として自由闊達に活動するのは多事多難なことではないかと感じたのも事実です。こうしたジェンダー(社会的・文化的な性のありよう)への視点は、

その後の研究課題に通底しています。

「看護学とは新しい科学である」、偉大なロールモデルが放った言葉が、私の目を開かせてくれました(朝倉)

丸山 どのような契機で医療系に進まれることになったのですか？

朝倉 私は専業主婦だった母から、女性らしい職業、人を癒せるような仕事に就いてほしいと言われ続けてきました。いつか家庭に入るのだから看護職がよいのでは、というわけです。科学の世界で学び研究したいと希求する私は、かなり葛藤しました。そうした苦悩を晴らしてくれたのが、運命的ともいえる出会いでした。たまたま足を運んだ看護系大学のオープンキャンパスで、日本の看護師としては初めて米国コロンビア大学(世界で始めて4年生の看護学部を擁した)で博士号を取得した樋口康子先生のお話を拝聴する機会を得たのです。先生は「看護学とは新しい科学である」と高らかに宣言されました。少なからぬ驚きをもたらしてくれたこの言葉は、私の未来を拓く鍵になってくれたようにも思います。自分の可能性の扉が開いたような気がしたものです。

丸山 朝倉先生の志向とお母様のご希望とが、合致したということですね。先生の場合は、樋口康子先生という素晴らしいロールモデルとの邂逅があったようですが、私の周りには規範となるような先輩がいませんでした。もちろんゼロではありませんでしたが、研究や教職の第一線で活躍するのではなく、補助的な役割を担っている方がほとんどでした。そういう時代だったのです。だからと言って、私が女性ならではの差別／区別に見舞われたということは一度もなかったですね。鈍感だったのかもしれませんが(笑)。大学院では、私が女性初の博士課程進学者者だったのですが、指導教員をはじめ周りの方のほうが「なんとしても博士の学位を取得してもらわなくては」とプレッシャーに感じておられたように思います(笑)。私の方とはいえば、そんな期待もどこへやら、なんともんびりとしたものでしたが、実験系の研究がとても楽しく、目の前にある興味を夢中で追いかけているうちに、成果が積み上がってきたように思います。

→
次頁



【丸山研究室・研究内容紹介】

保健学専攻設置に伴い、2008年4月にスタートした「看護アセスメント学分野」では、看護の対象とへの適切な日常生活援助を行うために必要なアセスメントの方法、さらに科学的根拠に基づく看護援助技術の開発及びその検証を行うことを目的としています。具体的には、「看護技術の科学的実証に関する研究」「性ホルモンと自律神経活動について」「環境や生活習慣が生体に及ぼす影響に関する研究」「創傷治癒過程における自然免疫機構の解明」などの研究を行っています。



千葉大学看護学部看護学科卒業、1984年同大学院看護学研究科修了、1988年同大学院医学研究科修了。医学博士。1988年千葉大学医学部非常勤講師、1990年労働省産業医学総合研究所労働保健研究部、1997年宮城大学看護学部助教授、2002年広島国際大学保健医療学部教授、2003年同看護学研究科教授、2005年東北大学医学部保健学科教授、2008年より現職。専門は、基礎看護学、呼吸生理学、環境生理学。著書に、『トータル人体解剖生理学』(共著、丸善2002年)、『ケーススタディ看護形態機能学』(共著、南江堂2003年)『呼吸器の症状とアセスメント-呼吸器ケア』(メディカ出版2005年)、他。